「課題の展開」によせて

上 野 泰

「われわれは何を為すべきか」において各氏が論じておられる論旨は大別して2つに分けられるようである。すなはち、「造園」と言うプロフェッションの存在意義は何であるかを見出そうとするものと、造園家として、いかに問題を解決して行くか、と言う外側からの問題と内側からの問題とに、しぼられるように思われる。前野氏はその論中で、それを「造園乃至造園デザインについては、通常2つの異つた立場から論じられているようである。即ち、1は現象としての造園を客観的にとらえる立場であり、1は職域なり、ナワバリとしての造園界に身を置く立場としての発言である」と指摘しておられる。そして現象としての前者が、後者を拘束することは当然のことである。したがつて、前者を論ずることが、根本的問題であると言えるが、造園とは何か、何を造園と呼ぶかを論ずることはもとより薄学の筆者のなすところではない。しかし、造園—Landscape architectureと言う分野が対象としているものが（造園がタッチしていると、いらないにかかわらず）現在どのように変化しつつあるかそして、それを動かしているものは何であるかを謙虚に見てゆくことは、この際おこたつてはならないことであると思われる。

「課題の展開」によせられた諸氏の中に、造園の本質を、リクリエーションの場として論じておられる方が多数あつた、これは寄稿せられた諸氏にとどまらず、現代の日本の造園界に於る一般的風潮であるようであるが、筆者はそこに大きな疑問をもたざるを得ないのである、これら造園家諸氏は、いかなる社会機構を対象として論じておられるのだろうか。筆者は、そのような「一位総リクリエーション」的、楽天的考察に、大くの疑問を持たざるを得ないのである。なるほど「増大する“ヒマ”をどう処理するか」といつたことが諸方で論じられ、又家庭電化、等々による“ヒマ”の増大といつたことがマス・コミ等で大々的に報じられていることはたしかである。しかし、電気ガマの普及が「家族から離れ、一人で飯たきする時間を、唯一の休息の時間と考えた農村の嫁から、その休息の時間をうばい、彼女らをより以上野良に狩出す結果となつた」日本であることを忘れてはなるまい。このような現状を無視してリクリエーションを謳歌することは、今年の大学新卒者に対する空前と言われる求人難をもつて社会不安などあり得ないと言つた某政治家の言と同類と言わねばならない。なぜならば、求人難とは、一部のいわゆる一流校のことで、地方大学のそれ

ではないのである。ましてや、炭鉱離職者の問題を見るだけでも、一部で言われるような平安の世とは言いがたい現状である。筆者は賢明なる造園家諸兄がこれらの事態に口をおく保守的大安ムードにのせられることを恐れるものである。造園家が勝手に作りあげたリクリエーション国家をかゝげて「世間の認識が少なくて困る」などと言うのは、こつけいであるばかりではなく、危険である。少くとも、そのよつて立つ社会を無視して「造園の将来」を論ずることは、社会から遊離した空論をもてあそぶこととなり、「エネルギーの集中的、効果的投入」とはならないであらう。

我々は、現代社会に於て Landscapeが、いかなる位置を占めているかを造園家としてではなく、一市民としてふり返つてみる必要がありはしないか、我々がこのような努力をおこたるならば、社会から、ただちに孤立してしまふであらう。多くの造園家から、羨望の目をもつて見られている建築家ですらも、社会一般から見れば、「特殊部落の住人」（広瀬鎌二・建築文化・1959・6月）でしかないのである。そして、そこで語られることは社会一般には通用しないのである、そして話の通じない一般市民の方がより学識的であると言わざるを得ないのである。筆者は造園家諸氏が「造園」と言うワクの中でのみ、その後進性を語ることの危険さを指摘しなければならぬと思う。なぜならば、そのような行為は、造園家をして、市民の庭から「キチガイ部落」の住人に引きおとすもの以外のなにものでもないからである。その昔 Architectural Forum誌の編集者である Douglass Haskell は「TVAでは原子力による前代未聞の資源の開発が、かねてから計画され、すすめられている。建築家が「建築」と「機械」との関係についておしやべりをしている間に TVA の人々は、構築物や機械をハンマーやネジ廻しのような、単なる附属品にすぎない位置に格下げしてしまつた、（中略）こうした事柄は趣味人ならば、それから逃避することが許されもしようが、建築家にとつてはいずれどうしてもマスターしなければならぬ課題である」と言つている、このことは建築家のみならず造園家にとつても重要な問題であらう。否、造園家の方により切実な問題と言わねばならないだろう。この狭い日本を見ても、干拓、埋立、開墾、用水、ダム、等々、おどろくべき物量戦をもつて（その良否は問わぬこととして）風景が刻々と変化しつつあることを知る事ができよう。今こそ造園家が趣味人として、世をすねるか、環境造成

者として社会に奉仕すべきか、の重大な岐路に立たされていると言える。我々は「風景の混乱、生活環境としてのランドスケープの貧困」を論ずる前に、素直にランドスケープの現状を見、そのよつてきたる所以を世間に通じるコトバをもつて語らねばならないのではないか、なるほど、現状のこのようなランドスケープの変貌は、そのほとんどがいわゆる「造園家」のタッチしてない所で行われている。それではなぜランドスケープに参与しない「造園家」が出現したのであるか、又、造園デザインの貧困、デザイナーの欠乏はなぜおこつたのであろうか

田畑氏は「日本における『近代造園学』は1910年～1930年にかけて、その時代に対応した学問的体系としてうちだされたものとされている」として、「そのような発展方向が、明日の Landscape Design への必然性をもたらるかどうかが、言うことについては多くの疑問が生ずるのである」と論じておられる、現代の造園家の系列を知るためにも1910年～1930年と言う時代を考えて見たいと思う。建築界に於ても、大工の棟梁と「工部大学造家学科」の卒業生をスタートとするいわゆる「建築家」とは異つた系列であり、今日に於ても両者は平行線として存在している。造園界に於ける庭師と大学の林学、農学科出身者を祖とする「造園家」とに於ても同様であろうそして、それら「造園家」が「近代造園学」を体系づけた1910年～1930年とは、言うまでもなく、明治神宮の造営と、それにつづく関東大震災の復興事業とによつて造園界が大いにうるおつた時代である。そしてそれらがどのように「その時代に対応」していたかを見なければならぬ。天皇制を謳歌すべく作られた明治神宮を期として興つた造園が、いかに国民的礎盤を欠くものであつたかを知らねばならない。又、その前後の公園事業も西欧文明の移入による「近代化」に急で、その根底となるべき市民社会を欠いていたことは、こゝで述べるまでもない。なるほど、護憲運動を始めとするデモクラシー思想がさかんとなり1925年には普通選挙法が制定され、政党政治が、軍部、官僚を一応おさえはしたが、政党政治のうらにあつた、財閥とのくされ縁から金権政治へと腐敗し、次の軍部、財閥の時代へとうつつて行つたことは諸兄の知るところである。そして震災復興事業も空前の大事業をうたわれながらも、都市問題はたな上げにされ、多くの震災復興事業公園も単なる防災空地にすぎなかつたのである。市民社会のない所に市民社会の産物たる公園を作つたという事を考える必要がある。そして、これらをおし進めたのは、「おかかえ庭師」たる官僚造園家達であつた。当然そこには、市民とのつながりなどあり得なかつた、彼ら官僚造園家は、市民に奉仕することよりも、法律に忠実であることをもつてその任としたのである。そこには何ら造園家のよつて立つ社会的礎盤

など存在するはずはなかつたのである。そのような「おかかえ庭師」の流れをくむ今日の造園家が、その社会的礎盤を見失つたとしても当然のことと言えよう。そして利用者との間に血のかよわぬ、官僚デザイナーの手でヒューマンな、すぐれたデザインの生まれるはずもなかつたのである。このような官僚機構を唯一のたのみとしてゆがんだスタートをした造園界が、テクノロジーの進歩と大衆の勃興を背景とする現代社会に於て大きな岐路に立たされたとしても、それは当然のことと言わねばならない。

それならば造園家は何を為すべきであらうか、筆者は造園家が、造園とゆう「部落」の中でその後進性を論ずるのではなく、まず生活者として、民衆の一人として、「今日」を把握することが必要であると思う、なぜならば、造園の存在意義を決定するものは、造園家ではないからである（ましてや、光榮ある日本庭園の伝統でもない）、一それは今日の我々の生活だからである、誤つても我々は造園を形から論ずべきではない、我々はまずその性能に於て語らなければならない。我々は造園を自動車や航空機と同列に論じなければならない、なぜならばそれらはいづれも今日の問題であるからである、その場に於て「造園界の特殊事情」などは通用しないのである。

斉藤氏は「車道の近くに設けられる小広場のデザインはパット見てパット感じる効果をねらうところに見る人々とのつながり（系）があるので、こみ入つたデザインよりは明快単純なアブストラクトスタイルが植栽でも彫塑でも、全体のデザインでも相応する場合が多い。こうしたスタイルは茶の間にまで入りこんでいるのもその本質を極度に単純化してみせるし方に対して現代人の直観は思っている以上にすなおに受け入る素地が出来ている」と言われる。この文章が、氏の「生態系概念」とどのような関連があるのか明らかではないが、つまるところ「こうしたスタイル」が造園を「生態系概念」によつて処理する有効である、ないしは、そのように処理すると「こうしたスタイル」になるかのである（氏のあげられた壁泉の例から推すと一筆者のひが目であつたらお許をいただきたい）そして氏は、その一例として佐世保市駅前広場の壁泉をあげておられる、筆者は氏の論旨そのものに必ずしも異論をとえぬものではないが「佐世保市の玄関をうけてたつ重々しい要求という、周辺からせまる種々の律動的内容をひきしぼり、たかめ上げてその実用的、合理的構造の計算の上に、軽快のうちにひきしまつたリズムが力強いボリュームに簡潔に躍動すると言うスタイルを目ざす」前に今日の我々の生活に於る壁泉の意義を論ずることが先であると思われる。筆者にはこのような前提問題をぬきにした空間処理理論にいきさか疑問を感じるのである、（同様なモデュール論も、

科学主義も同様である) 又、筆者には、氏のあげられた例が「ものの本質を極度に単純化してみせるし方」とも思えないし、「軽快のうちに……云々」と言うデザインにも見えないのである。それは単なるモダニズムアブストラクトにすぎないと思われる。氏の例を引あいに出して恐縮であるが、我々は、このような形から論ずることの危険さを十分に究極める必要がある。当世、アブストラクトにあらざれば現代にあらず、と言うような風潮があるが、そもそも近代芸術運動は、芸術と様式から再び人間の手にとりもどそうとする戦いであつた、したがつて、それらは当然ヒューマンな発言であつた、それ故、彼らは芸術の本質の問題にさかのぼつてスタートしたのであつた。けしてスタイルからスタイルへの変貌ではなかつたのである。このことは近代建築運動に於ても同様であつた、彼らの目指したものは、オーナメントの追放ではなく、建築を「人間の家」La Maison des Homme (ル・コルビュジエの著書) とすることであつた。それ故、彼らは機能主義と呼ばれたのである。したがつて造園に於るアブストラクト・スタイルと同一視はできない、なるほど、そのようなスタイルが現代人の心理的要求をかなえるかも知れない。しかし、現代的生命をもたない単なるスタイルはアカデミズムにすぎない。もし、我々が彼らから学ぶとすればそれはスタイルではなく、芸術を、建築を、人間の手にとりもどそうとした彼らの戦いにはかならない。

我々は、そのようなスタイルを氾濫させる、コモーションリズムに警戒しなければならない。今日の造園デザインはまさに「百鬼夜行」の感がある、このような個性主

義的傾向は共通の目標を見失つた時に生ずるものである。共通の目標を見失つた社会に於て、人々は個人主義化、利己主義化するのは当然である。これは単に造園界内部の問題ではない、今日の我々の社会は共通の目標を見失つている。そして、今日の我々の社会の背後にある大きな問題から我々の目をおくわしめているコモーションリズムとそれをバックアップする一部分子に我々は充分警戒をしなければならない。

今日の問題は、単にデザイナーの個性によつて、解決されない問題である、我々は共通の課題を見出さなければならない。その為に一さいのナワバリ意識、自意識をすて、今日の社会を見る必要がある、そのような視界を持たなかつた「東京造園懇話会」が、わずか一年余でもつて無期休会に至らざるを得なかつたことは当然と言える。

筆者は、社会的礎盤を欠いたリクリエーション談議やモダニズム信奉の楽天的、快樂主義者の反省をうながしたい。

我国は年々、台風に見舞われ、その被害は決して少なくない、ものであり、人命にかゝわる重大事である、趣味人として世をすねるのならばいたしかたもないが、もし造園家が、人間の生活環境を造成すると言う自負をもつならば、これらの問題に目をおくことはできないであろう。「民衆のための心の環境」を作る前にその民衆の安んじて生活できる国土を作らねばならない。

これらの問題に正面からとり組む時、たとえ、汚なくギコチなくても、正しいものが生み出されると思うのである。(筆者; 千葉大学)

本 会 記 事

○35年度第3回編集委員会(35.12.15) 於東大造園教室。
江山委員長 小沢・鈴木・北村(文)・池原・田畑・塩島・前野・糸賀・竹内委員出席

〔議事〕造園雑誌24巻3号編集

○35年度第4回編集委員会(36.1.15) 於東大造園教室。
江山委員長鈴木・池原・前野・糸賀・田畑・北村(文)・小沢・塩島・竹内委員出席

〔議事〕造園雑誌24巻4号編集

○35年度第3回常務理事会(36.1.31) 於都市計画協会会館。佐藤・横山・木村(英)常務理事、北村(信)・鈴木・小沢幹事出席。〔議事〕1 募金計画に関する件、2 定款改正に関する件

○35年度第2回理事会(36.2.4) 於渋谷みやこ。北村会長、佐藤・江山・横山常務理事、金子・加藤(誠)・池ノ上・平林・田中(順)理事、小坂・石神・木村(三)監事、北村(信)・小沢幹事出席。〔議事〕1 編集関係報告、2 庶務関係報告(会計中間報告) 3 会員入退会に関する件 4 定款改正に関する件、5 昭和36年度春季大会並びに研究発表会に関する件、6 募金計画に関する件、7 IFLA大

会に関する件、各件について審議決定。

○懇親会(36.2.4) 渋谷みやこ。折下・井下・田村・丹羽四名誉会員、北村会長佐藤・江山・横山常務理事、金子・池ノ上・平林・田中(順)理事、小坂・石神・木村(三)監事・北村(信)・小沢幹事出席。各名誉会員よりドイツ留学当時の思い出・材料及び施工について・自然保護について・昔の思い出等非常に有益なお話があり、北村会長より今後めざむこのよう会合をつづけたいとのあいさつがあつた。

会員移動(入退会)

36.2.4 昭和35年度第2回理事会承認(敬称略)〔入会〕正会員: 斉藤英彦(山下設計事務所)・木村雅寛(宮内庁)・山脇信男(あやめ池遊園)・大内謙三(長崎県庁)・野沢清(東京個人)・池田正和(堺市庁)・榎本敬一(名鉄) 准会員: 阿久井喜孝(東大丹下研)・井上芳治(東農大)・室田雄一郎(東農大)・宮本順治(東農大)・本間進(東農大)・大河原邦之(東農大)・久保田宗治郎(東農大)・村治宏一(東農大)・藤浪泰久(東農大)・松田邦弘(日大)〔退会〕正会員: 山尾巖(大阪府庁)